

[シンポジウム記録]

日本スラヴ学研究会発足記念シンポジウム 第2部「スラヴ諸語とその隣人たち ～ドイツ語、イディッシュ語～」

西 成彦

「西スラヴ学研究会」から「日本スラヴ学会」へと名称を変更した私たちの学会がカバーする地域は、かつて「東欧」の名で呼ばれてきた地域とほぼオーバーラップする。もちろん、「東欧」概念については、とくにヨーロッパ冷戦の終結や東西ドイツ国家の統一以降、大きな見直しを迫られ、「中欧」との切り分けが難しくなっているが、私見を述べるならば、「ドイツ語」でも「ロシア語」でもない諸語を話す話者が大半を占めながら、独自の「国民国家」を立ち上げることができないまま、周辺列強の「国家語」の支配に苦しんできた地域、そして十九世紀から二十世紀にかけての長い時期、ロシア（もしくはソ連邦）、およびドイツもしくはオーストリア、あるいはオスマン帝国の政治的支配・軍事的占領に苦しめられた地域、それを「東欧」と呼んでおきたい。もちろん、ここでいう「東欧」には、ハンガリーやルーマニア、そしてエストニア・ラトビア・リトアニアといった非スラヴ語を「国語」とする諸地域もまた含まれるが、「東欧」という歴史的・地政学的概念は、スラヴ諸語と、これらの非スラヴ系諸語との「隣接関係」によってしか説明できない。したがって、われわれの「スラヴ学」は、「ロシア語」まで含めた「スラヴ諸語」と、「東欧」地域の「非スラヴ諸語」との「隣接性」を意識しながら、ようやく輪郭が定まるものだと考える。

したがって、今後も本学会では「スラヴ諸語」ばかりでなく、それら「東欧」の「非スラヴ系諸語」にも応分の注意を払うべきだし、まさにそうした領域をカバーする研究者の加入や協力を得ることなしには、私たちのめざす「スラヴ学」は完成しないと考える。

そこで、今回のシンポジウムではこうした「スラヴ諸語」と「非スラヴ系諸語」の「隣接性」を考える試みとして、かつてポーランド語やチェコ語といった「西スラヴ語」が密接な「隣接関係」のなかに置かれていたイディッシュ語とドイツ語に光をあて、こうした「隣接関係」に着目することが「スラヴ学」にとっていかに重要であるかを考えたいと思う。

かつて、三国分割時代のポーランドや、チェコ（ハプスブルク帝国時代のベーメンやメーレン）には、ドイツ語と「西スラヴ語」を使い分けるバイリンガルが数多く存在した。またそうしたなかで、ドイツ語と母体を同じうしながら、「東欧」諸語との接触を経て独自の成長を示したイディッシュ語は、「東欧」全域（とくにハンガリー・

ルーマニア以北)のユダヤ教徒のあいだの言わば「リング・フランカ」であった。「西スラヴ語」とドイツ語、そしてイディッシュ語が、はっきりとした「境界」のないまま「併存」していた時代は、第二次世界大戦の終結後、そしてユダヤ人の大量虐殺後、すでに過去のものとなった観があるが、少なくともそれまでの歴史は、「併存」を「現状」として是認するしかなかった。両大戦間期のポーランドやチェコ＝スロヴァキアにおいて、住民移動をまで含めた「領土的解決」は、ほとんど議論の俎上には上らなかった(ポーランドにおけるユダヤ人の「マダガスカル移送計画」があった程度である)。本シンポジウムでは、そうした二十世紀前半をふり返りながら、「スラヴ諸語」をかならずしも一義的には「母語」としない、その隣人たちが何を考え、どのような「東欧」を構想していたのかをふり返り、今後、私たちの学会が「スラヴ諸語」とその隣接言語との関係を見ていくための第一歩としたい。

二言語作家デボラ・フォーゲル:イディッシュ語とポーランド語の文学実験

田中 壮泰

20世紀初頭のガリツィアで、イディッシュ語とポーランド語で詩や美術評論等を書いたデボラ・フォーゲルは、ブルーノ・シュルツとの交流によってポーランド文学史に名を残してはいたものの、言語的な理由から彼女自身に関する研究は遅れていた。しかし、ここ数年、ポーランドの若手研究者カロリナ・シマニャクを中心にして、盛んに論文や研究書が書かれるようになり、また日本でもポーランド発の研究に触発された加藤有子が論文でとりあげるなど、徐々に脚光を浴びつつある。

本発表も、ポーランドや日本での先行研究を踏まえ、フォーゲルの作品と当時の時代背景などを紹介した上で、ポーランド語を母語とする同化ユダヤ人の家庭に育ったフォーゲルが、あえて独学でイディッシュ語を身につけ、イディッシュ語詩人としてデビューした背景に問題を据えて考察するものである。

イディッシュ語で書くというフォーゲルの選択は、家庭環境だけでなく、当時のガリツィアの言語状況から見ても異例のことであった。14世紀からポーランド領となり、ポーランド分割後はオーストリアに統治されてきたガリツィアでは、ドイツ語とポーランド語がともに支配的であったことから、ポーランド語やドイツ語で書くユダヤ人の数は多くても、イディッシュ語で書こうとするユダヤ人はきわめて少なかった。このような状況を打開するため、1929年に若いイディッシュ語作家たちがガリ

ツィアのイディッシュ文学・芸術ムーブメントを立ち上げる。フォーゲルはこの頃から、執筆言語の中心をポーランド語からイディッシュ語に切り替え、ガリツィアのイディッシュ文学運動の中心メンバーとして活躍することになる。

しかし、彼女の活動範囲はガリツィアにとどまらず、ニューヨーク在住のイディッシュ語作家たちとも連携して、ニューヨークの文学グループ「イン・ジッフ」の活動をガリツィアに紹介したり、ニューヨークの雑誌に自らの詩を投稿したりするなど、ガリツィアとニューヨークの橋渡しする仕事に奔走した。すでに当時、移民たちを通じてイディッシュ語文学は世界的なネットワークを形成しており、フォーゲルはそのネットワークを積極的に利用するのである。

ガリツィアにおける言語間のヒエラルキーだけを見れば、当時は支配的であったドイツ語やポーランド語を身につけていたフォーゲルが、少数派のイディッシュ語で書くことは、無謀なことのようにも見えるが、当時、イディッシュ語は、その書き手に、ポーランド語やドイツ語では不可能な、より広範囲に渡る越境的な文学活動を可能にした。

これまではシュテトルを描く伝統的な文学が多かったイディッシュ語も、フォーゲルの時代にはユダヤ的な内容に拘泥することなく、むしろエグゾティシズムやローカリズムをはねのける自由な創作を可能にする言語として、新たな段階に入りつつあった。フォーゲルのイディッシュ語詩にはパリやベルリンの街並みが描かれるが、東欧のシュテットルのようなユダヤ的な風景はほとんど描かれることがない。つまりフォーゲルがイディッシュ語を選択したのは、ユダヤ的な伝統に回帰するためであったわけではない。彼女は、伝統の継承としてのイディッシュ語ではなく、諸大陸を結ぶ「公用語」としてのイディッシュ語の可能性に目をつけたと言える。

今回の発表では「二言語詩人」と銘打っておきながら、イディッシュ語作家としてのフォーゲルだけを論じた。フォーゲルはイディッシュ語と同時にポーランド語でも執筆活動をおこなっており、こうしたバイリンガル作家としてのフォーゲルについて考えるべきことは多い。

多言語の東欧ユダヤ世界——「ブンド」とイディッシュ語

西村 木綿

東欧ユダヤ社会では、ヘブライ語（宗教的実践にかかわる言語）とイディッシュ語

(日常語)のダイグロシアが保たれ、ホスト社会との交渉においてはポーランド語やロシア語など居住地の主要民族の言語が用いられるという、三言語、四言語使用を常態としていた。後者については、18世紀のハスカラー(ユダヤ啓蒙)以降、知識人層のユダヤ人が社会的上昇を図り、ときに唯一の使用言語とするまでに身につけたという経緯がある。19世紀後半に活性化したユダヤ・ナショナリズムの先導者たちは、この状況がユダヤ人の近代的民族(nation)としての未熟さを示すと考え、一つの「民族語」(ヘブライ語ないしイディッシュ語)を中心に営まれるユダヤ人の民族的な社会生活を展望した。本発表では、イディッシュ語を民族語と掲げた人々による思想・運動——しばしば「イディシズム」と呼ばれる——を、その中で重要な役割を果たした社会主義組織「ブンド」に着目しつつ概観した。

イディシズムの要点は、ユダヤ人の民族語としてのイディッシュ語の認知をユダヤ社会の内外に求めるとともに、それにロシア語、ポーランド語等に劣らない「文化言語」としての内実を付与することにあった。ポーランドで1921年に設立された「中央イディッシュ学校機関(Tsentrale yidishe shul organizatsye、通称TSYSHO)」は、イディッシュ語による世俗的・近代的な教育制度の確立を目指し学校網を広げた。1925年に設立された「イディッシュ科学研究所(Yidisher visnshaftlekher institut、通称YIVO)」は、イディッシュ語によるアカデミズムの確立を目指した。TSYSHOやYIVOの運動に関わったブンドは、一民族一国家原理によるユダヤ人国家の建設を否定し、現住地におけるユダヤ人の文化的自治を唱えていた。イディッシュ語による教育・学問体制の確立はその実践のための足がかりと考えられた。TSYSHOやYIVOの目指したイディッシュ語による教育・学問体系は、社会生活の全領域を覆う言語・文化システムを構築しながら、その言語による国家の占有を否定する、唯一の国語としての地位を求めない、という構想であった。

イスラエルの成立とともにユダヤ人の「民族語/国語」として揺るぎない地位を得たヘブライ語とは対照的に、第二次世界大戦以前、全世界に1000万人以上の話者をもったイディッシュ語は、ホロコースト、そして、各地に移住したユダヤ人が当地の主要言語を身につけていく過程で、話者数を激減させた(現在100万人以下)。YIVOでは言語学者のマックス・ワインライヒや歴史家のエリアス・チェリコーヴェルといったイディッシュ・アカデミズムの先駆者のもとで膨大な量の文献収集がなされ、多数の学術論文がイディッシュ語で書かれたが、これらを対象とした研究は北米やイスラエルのユダヤ研究の中ではマイナーである。だが、イディシズムの残した遺産は、単に個別研究としてのみならず、普遍的な意義をもつ重要な研究領域になりうると発表者は考える。

TSYSHOやYIVOの歴史は、日常語でしかなかった言語が、普遍知への橋渡しをする教育の言語となり、また普遍知を生産する学問の言語になる、という過程を短期

間のうちに凝縮している。その歴史は、一つの言語の生存可能性や国家と言語の関係などを考える上で、示唆的な事例となるだろう。

世紀転換期のプラハとユダヤ・ナショナリズム

中村 寿

本報告では、スラヴ世界の隣人としてのオーストリア帝国プラハのドイツ系ユダヤ人という観点から、彼らのナショナリズム党機関紙に焦点をあてた。本報告は、それから読み取られるドイツ系ユダヤ人シオニストの視座が、スラヴ世界とは直接的な接触のなかったドイツのユダヤ教の視座とはどのように異なっていたのかという、ユダヤの自己同一性に対するオーストリアとドイツの見解の違いに触れることを目的としている。

『自衛——隔週ユダヤ独立新聞 (Selbstwehr Unabhängige jüdische Wochenschrift)』は、1907年3月に創刊されたドイツ語によるユダヤ・ナショナリズムの宣伝新聞である。その創刊のための背景には、ドイツ人に対するチェコ人の国民的利益の要求に倣った、ユダヤ人の国民的利益の主張を目的とする宣伝機関紙創設の要請があった。

『自衛』の創刊、編集には、ハンス・コーン、マックス・ブロートといったプラハ大学ドイツ語部門のシオニズム学生機関「パール・コクバ」出身の著名なドイツ語作家、思想家が関与していた。そのなかでも『自衛』の評価を高めるにあたり、実質的に最大の貢献をした人物がカフカである。カフカは1915年、「律法の門前」を『自衛』に提供した。それにより『自衛』は、カフカの生前原稿の一部を掲載した媒体のひとつとなった。1919年以降、彼の友人のフェーリクス・ヴェルチュが『自衛』の編集をつとめるようになると、カフカは「皇帝の綸旨」、「父の気がかり」を『自衛』に提供している。

雑誌名称としての『自衛』からは、もちろん反ユダヤ主義に対する自己防衛の意味が読み取られなければならないが、同時に〈同化〉に対する自己防衛の意義もまた認められなければならない。なぜなら、シオニストは同化を「国民的な自己去勢」とよび、ドイツ人とドイツ系ユダヤ人の違いを信仰のみの違いと見なすリベラルのユダヤ教によるユダヤ人解釈を「虚構の想像」として糾弾したからである。この「虚構の想像」に対置されるのが、ユダヤ・ナショナリティの所在という「真実」であった。

『自衛』では、ユダヤ民族の再覚醒がヨーロッパの少数民族のもとでのそれと等価

のものとして位置づけられている。それゆえに、それが喚起するユダヤ民族の再覚醒は、ユダヤ民族の政治的解放運動として意図されていることが読み取られる。一方で、ヨーロッパにおける少数民族の再覚醒は、カタロニア語やケルト語などによる民族語文芸の創出を意図していた。プラハではこの国民文芸の創造という話題が、ドイツ系ユダヤ人によるドイツ・ユダヤの国民文芸の創造への要請として解釈される。ドイツ系ユダヤ人による国民文芸のための模範に位置づけられていたのが、東欧のイディッシュ文学であった。

このような状況を踏まえれば、カフカのイディッシュ演劇体験や『自衛』のルーマニア、ロシア報道は、ユダヤ・ナショナルの文化の構築を目指したシオニズムによる影響の一部に数えられる。

オーストリア帝国のユダヤ教と比較すると、ドイツのユダヤ教には、ユダヤの自己同一性にナショナルな要素を見出そうとする姿勢はまったく見られない。ドイツのユダヤ教のもとでは、ユダヤ人は信仰によってしか決まらなないと見なされている。

オーストリアのユダヤ教とドイツのそれとの間に認められる相違について、報告者はオーストリアに特有の多民族世界の経験によるのではないかという展望を示した。

両大戦間期ポーランド文学とドイツ文学

加藤 有子

「ポーランド文学」とくくられているものは、ポーランド語という一つの言語文化圏で生成したもの、純粹培養されたものではない。文学に再現されたイメージの系譜は一国、一言語の文学史や文化史を突き抜けて広がっている。オーストリア領東ガリツィア生まれのポーランド語作家ブルーノ・シュルツの作品に現れる広告イメージと短編小説における言語の二重性からそれが見えてくる。

1935年に雑誌に発表された短編「書物」(1937年の短編集『砂時計の下のサナトリウム』に収録)のなかで、一人称の語り手の少年(作者の少年時代を彷彿とさせる)は、挿絵入り古雑誌に育毛剤の広告を見つける。そこには地にまで届く長い頭髪を誇らしげに示す女性アンナ・チラーグの姿があった。髪の薄かったアンナが自分で作ったポマードによって豊かな髪を得た、という広告であり、アンナが語るその身の上話がイラストの脇に印字されている。

「わたしはアンナ・チラーグ」という見出しで始まるこのアンナ・チラーグの広告

には実在のモデルがあった。19世紀末から両大戦間期にかけて、ポーランドのみならず、オーストリア＝ハンガリー帝国の広い地域で繰り返し印刷されていた。ブルーノ・シュルツの情報を集めたサイト (www.brunoschulz.org) からさまざまなデジタル・アーカイブにリンクが張られ、各国語のアンナ・チラーグの広告が紹介されている。このソースを利用し、ポーランド語、ドイツ語、スロヴェニア語、ハンガリー語、スウェーデン語等々、アンナ・チラーグの広告と物語がスラヴ語圏、東欧といった枠を越えて、広く中欧以東、以北で共有されていたことを示した。研究者カネッペレのシュルツ論、そしてちょうどオーストリア伝記事典・伝記資料研究所がウェブ上に発表したアンナ・チラーグに関する記事によれば、アンナ・チラーグのポマードの本社があったオーストリアやハンガリーでは、アンナ・チラーグの広告イメージは文学作品のなかで冗談やジョークの対象として扱われていたという。一方、両都市から離れた両大戦間期のポーランド語圏の文学では、アンナ・チラーグは遠くの異国的で伝説的な女性像のまま記憶され、文学作品に現れる。シュルツと同時代のユゼフ・ヴィトリン、その一代あとのチェスワフ・ミウォシュの詩にも現れるアンナ・チラーグ像は、このイメージが両大戦間期のポーランド人にとって、幼年期という良き時代の象徴として機能していることがわかる。

アンナ・チラーグは「ポリグロット」だった。このことが示すのは、イメージが言語圏という枠を越えて循環し、それぞれ独自の意味を帯びて受容され、変容し、作品のなかで新たなイメージを獲得していくということである。

シュルツの1936年の短編「夢の共和国」は、ポーランド語とドイツ語のある種の言語接触の痕跡である。ポーランドの研究者プシブィスワフスキが指摘している通り、アルフレート・クービンの小説『対極』(1908)に現れる特徴的な固有名詞「青い目の一族」(die Blauäugigen)は、シュルツのこの短編にその直訳「青い眼の人(男)」(Błękitnooki)として現れる。

シュルツはドイツ語とポーランド語を使用した。シュルツという二言語使用者を介して、瞬時かつ同時的に、ある言葉がイメージに翻訳され、そのイメージがもうひとつの言語へ翻訳される。シュルツのテキストの生成には、このプロセスがところどころに介在している。

ちょっとしたイメージと言葉も言語や国を越えた系譜と広がりを持っている。ポーランド語文学とされているものも、複数の言語にまたがる文化圏のなかで生まれたものであり、両大戦間期のポーランド文学とドイツ文学の関係も「影響」ではなく、文化圏の重なりゆえの「同時性」としてみえてくる。